

【タイトル】 創立40周年記念交流旅行

【担当部会名】 青年部会

【日時】 平成22年10月7日(木)～9日(土)

【場所】 北京

【概要】 10月7日、北京空港に降り立つ。1ヶ月前に起きた「尖閣事件」であやしい雲行きの中「行くか、行かざるべきか」議論を尽くした上での訪問。あらかじめ配った“北京訪問にあたり”には「反日的な言動に会っても、日本人として立派な態度で行動すること。」とやや「悲壮」な文言が漂っている。一面の霧で空港全体が見渡せない。(あとでスモッグと判明。) 緊張しつつ入国した。

首都の様子は想像をはるかに超えていた。新しい建物すべてがとにかく立派で“デカイ”。中国の「勢い」を感じる。5年前の“上海研修参加組”からは「どことなく緊張した雰囲気がある。」の声も。政治の中心地ゆえの緊迫感か。



満漢全席を囲んでの、中国青年起業家との交流

中国人ビジネスマンとの交流は大きな目的のひとつだ。三浦副会長紹介の、中国国内の大型発電所などに工業製品を納める仕事をしている青年起業家は「中日関係は今後さらに深まるだろう。今は中国が日本製品を大量に輸入する時代。これからは中国の工業製品を日本が輸入する時代になる。」中国青年の鼻息は荒い。幅広い意見交換を行い、一日目の夜は更けた。

二日目は天安門広場と万里の長城だ。実際に歩いてそのスケールに改めて度肝を抜かれた。天安門広場ではX線装置による持ち物検査を受ける。毛沢東の大きな写真をくぐった後、4 kmも歩いてやっと反対側に出た。息をはずませて登った万里の長城の総延長は6 0 0 0 km(!)。どこまでも先があるはずだが、スモッグで近くの山しか見えない。大気汚染も広大だ。

心配していた「反日」的な言動には一切会わなかった。親切で懸命に生きる人々。一党支配で土地はすべて国のものという仕組みの中で「政府と個人は別」とどこか醒めているようにも見える。日本にいと「中国中で反日デモをやっている」ような錯覚に陥る。逆もまたしかり。実際にその現場に足を運ばなければ真実は分からず、お互いを理解することも出来ないと感じた。しかし先の中国人起業家からは「我々と日本人の歴史認識は違う。」という発言もあった。日本と中国は紆余曲折はあっても結びつきを強めていくと多くの人が思っているが、その前途は北京のスモッグのように先が見えない。天気晴朗なれども、霧深し。

文責（佐）